

会報

〒183-8534
東京都府中市朝日町3-11-1
東京外国語大学
ロシア語渡辺研究室内
東京外語ロシア会
TEL&FAX 042-330-5265
振替口座 00110-8-22338

ワシーリー聖堂の丸い屋根

ロシア会副会長 古茶 兵衛

外語のロシア科を卒業して53年目の昨年九月私は初めてロシアの地を踏んだ。同窓会のツアーに同行したのである。旅程表には赤の広場、クレムリン宮殿、セルギー修道院等訪問先が組まれていた。最初に訪れたのがワシーリー・ブラジエンヌイ聖堂で、私はこのロシア正教の伝統的教会の建物にカルチャーショックを覚えた。イワン雷帝がカザン・ハン国を陥落させ、勝利を記念して建立されたものという。

私はこの不思議な建物の前に暫く佇み、そのドーム型の屋根の姿に十四世紀イスラム教に改宗したタタールの影響を見た。此の国が如何に長い間「モンゴル・タタールのくびき」の下に苦しんでいたかを如実に物語るものである。強烈な印象を受けた私は、単なるエトランゼの域を脱して、ロシアの過去の歴史を紐解いてみたくなった。

八世紀、日本で平城京に遷都が行われた頃ロシアは未だ国を成していない。



ワシーリー聖堂

十二、十三世紀にロシア諸侯国が興り、同世紀にモンゴル帝国の強襲を受けてモスクワは完全に破壊され住民は虐殺された。以来約二五〇年に互り支配を受ける事になる。キプチャク汗国はロシア農民に大変苛酷な税を課した。

- 府中便りー母校の現状…2
- 独立法人化と四大学連合プロジェクト…2
- 飯田規和先生追悼…3
- 03年ロシア会…3
- ロシア経済と日ロ経済協力…4
- ロシア音楽界の動向とナシヨナリズム…6
- 2年語劇…7
- ロシア留学記…7
- 会計からロシア会収支報告とお願い…8

モンゴルは、殺伐な軍事力での頃華やかに進行していた西欧のルネッサンスから、文明からロシアを遮断した。此のことがスラブ独特の文化を育むことにもなった。モスクワが地理的にビザンチン帝国に近かったため、又ルネッサンスの影響が殆どなかったが故に、ロシアはギリシャ正教を受容し国教とし、ロシア正教と呼ばれた。此の国は宗教改革とも無縁であった。

ロシア正教の教会は正教独特の神秘的な魅力に満ちている。正教の聖堂は縦と横が同じ長さの十字形で、真ん中に大きなドーム(円蓋、回りに四つの小さいドーム)があり美しい。正教の聖堂の中では壁画やモザイクはすべてがほの暗い光の中で何とも言えない神秘的な雰囲気包まれている。丁度私共がセルギー大修道院を訪れたとき、堂の中ではローソクがゆらめいて、ミサが行われていた。ロシア人にもお遍路さんの様な方々が見受けられて、それらの方々が歌う聖歌が、暗い一隅から聞こえてきて、その美しいハーモニーにうっとりさせられた。

此の国の歴史を続ける。十五世紀モスクワ大公国が興りイワン三世の時代

に「モンゴル・タタールのくびき」から完全に自由となり、さらにイワン四世(雷帝)はロシア諸侯を統一、一五二一年と一五五六年カザン・ハン国とアストラハン・ハン国をそれぞれ征服併合した。この時、アストラハン・ハン国を流れるトルコ語で川という意味の「ヴォルガ」がロシア人の川に変わる事になったという。

ロシアは大航海時代、産業革命、植民地時代とも殆ど無縁であった。それ故にウラルの南の台地とシベリヤへの拓殖に民族エネルギーを集中できたのであるか。ピョートル大帝、エカテリーナ二世に至る頃のロシア帝国版図の拡大には目を見張るものがある。十九世紀初頭まで農奴制を基盤として、貴族社会の矛盾を孕んだまま発展してきたロシア帝国はクリミア戦争、日露戦争、世界戦争等の試練に耐えきれず、ついに一九一七年に崩壊した。革命、以後70年余に及ぶ共産政権、そしてペレストロイカ、今、この国は混沌の裡にある。モスクワの中心街は別としても、地方では犯罪が多発し、民族問題では政情不安である。十九世紀ロシアの文学、音楽、絵画、バレエ、オペラ等に示された高いレベルは何処に眠っているのか。しかし依然ロシアはアメリカのカウンターバランスとしても充ち頼もしい国であり、日本民族が本腰を入れて、ロシアという「鐘」を叩くならば、聞き応えのある音を返してくるのではあるまいか。ロシアは今、知れば知る程興味深い。(昭25年卒)

府中便り——母校の現状

渡邊 雅司

大学の独立行政法人化

二〇〇四年四月からの独立行政法人の移行にむけて、学内では大学院の改革や六つの大語科を除いた16の専攻語がモジュール制という学年ではなく達成度別にクラス編成をはかる制度に移るための準備で、とにかく会議の多い一年でした。しかもつい最近になって、当初の公約とは違つて、運営交付金が毎年削減されていくことが、財務省から発表され、予算全体の7割を人件費が占める本学は非常勤講師の削減にとどまらず、専任教員の雇用条件まで悪化することが判明し、激震が走っています。そういう情勢であるからこそ、さまざまな面でロシア会のようなOBの力をお借りしなければ困難に遭遇することは、目にみえているのに、なんとしたことが、昨年から大学当局は卒業生の名簿の公表をやめてしまい、このままでいくと外語会の存続の危機にもなりかねない状態になっています。

専任スタッフの異動

ところで新年度から専任スタッフに異動があります。言語・情報講座の磯谷孝教授の後任として小樽商大の匹田剛助教(昭61年卒)が着任し、総合文化講座のドーリン教授が退職します。

学生たちのロシア留学

また学生たちが毎年大挙してロシアに留学する傾向はつづいています。留学先はモスクワとペテルブルグが主流ですが、イルクーツクやノボシビルスクなど地方都市への留学組も出てきて、頼もしい限りなのですが、その反面治安がかなり乱れていると、とくに東洋人蔑視が強まってきているといわれて、事件にだけは巻き込まれないでほしいと祈っています。とまれ大半の学生たちが語学力の向上はもろろんですが、ロシア人との付き合いから確実になにかをつかみ人間的に大きくなって帰国していることは、われわれ教師にとつて救いです。そうした学生たちに、では何がよかつたかとたずねると、はっきりしたこたえが返ってくることはまづない。でもそれでいいのだと、ほくはおもひ。かれらはチユツチエフの「知ではロシアはわからない」の意味をからだだけで受け止めてきたのだと思うからです。

府中キャンパス

府中に移転して三年半が経とうとしています。西ヶ原を知らない第一期生がこの春、卒業を迎えます。ようやくグラウンド、留学生日本語センター、留学生寮が完成し、キャンパスもソボールが出来上がった観があります。府中キャンパスに来たことのないOBにはぜひお時間のあるときに立ち寄られることをお勧めします。とにかく緑が多く、空が大きい。建物自体も従来の国

立大学の概念を超えています。それにいま話題の近藤勇の生家や道場がすぐ近くにあり、多磨墓地にはゾルゲの墓や、かつての外国人教師ミチユーリン先生の墓もあります。このミチユーリン先生の墓は長年佐藤純一氏(昭29年卒)が守ってきたのですが、三年前からはロシア会が引き受けました。今後もし外語祭に合わせてロシア会を開きますのでどうかお顔を見せてください。旧交を温めましょう。

(東京外国語大学教授・昭44年卒)

国立大学の独立行政法人化と

四大学連合プロジェクト

亀山 郁夫

二〇〇四年四月から、全国の国立大学は独立行政法人に移行し、文字通り、弱肉強食の時代に入る。今後、私たちに求められるのは、みずからの大学の理念や伝統を失うことなく、いかに創意をいかし、魅力的な大学作りにつながるという点である。

そうしたサバイバルに向けた努力のなかで、今後、大きな役割を果たしていくだろうと思われるのが、四大学連合の枠組である。非常勤枠の大幅削減ないしは全面カットという事態が押し寄せるなか、すべて自前で、の発想は捨てなくてはならない。いかに、たが

いの持ちものを上手に貸し借りするかが、ポイントになる。そこで浮上してくるのが、もはや「古くて」、なおかつ「新しい」四大学連合プロジェクトというわけだが、最近の現状と進捗をごくかいつまんで紹介しておこう。

東京医科歯科大学、東京工業大学、一橋大学そして本学の四大学は、二〇〇一年(平成十三年)に「四大学連合憲章」に調印し、たがいに研究教育面で強力な協力関係を結ぶことを誓った。しかし、現実には、本学内でのコンセンサスの遅れや、他大学との競争性などの問題もあり、本学にとつてはいささか厳しく苦いスタートとなった。しかし、昨年四月、東京工業大学との間に最初の複合領域コース「国際テクニカルライティング・コース」が立ち上がり、来春には、東京医科歯科大学との間に同様のコースが設置されるなど、全体の雰囲気はかなり前向きなものとなっている。本学からすれば、これからは出番といったところだ。しかし、四大学連合に関する最近のトピックといえは、東京医科歯科大学大学院でこの四月に発足する医療管理政策学の修士課程である。このプロジェクトには、四大学の教官がそれぞれ積極的にかかわり、新聞、テレビでも報道されるなど、評判を呼んだ。そして、いざ、蓋をかけてみると、これがかなりの高倍率のことである。何とも、うれしい限りである。私自身も「世界の医療と文化」について講義を行う予定でいる。

最後に、これはまったく私見ではないが、今後の大切な課題として、一橋大学との間に、何かしら少数精鋭のコースを設定できれば、と思う。さらに、四大学の教官が一堂に会し、21世紀ないしはポストグローバル時代にふさわしい新しい教養教育のシステムを開発できれば、とも。何しろ、そうした目的のためにこそ、これら四大学間には、遠隔講義のための太いケーブルが敷設されているのだから。

文法を、佐藤勇先生を筆頭に、東郷、和久利、石山という、今から言えば大変な大家に習ったものの、話すことはおろか、簡単な文章をつづることができないことにも苛立っていた。大学だけではロシア語はものにならないと勝手に思い込んだわたしは、当時代々木にあった日ソ学院の作文コースに出ることにしたのだった。そのとき一緒の行動をとったのが、早大露文から編入してきた中村昌代(旧姓金子)さんだった。

文学青年のままに

飯田規和先生追悼

渡邊 雅司



飯田規和先生追悼
渡邊 雅司

新潟で学長をされている飯田先生が癌に冒されているとは聞かされていたが、恐れていたことがついに起こってしまった。正月も明けた1月11日未明に先生は不帰の人となった。

わたしたちは外語以上に老朽化した木造の教室で興味津々と講師の登場を待った。そこに姿を見せたのは、白い開襟シャツ(当時流行っていた)を着た三十代前半かと思われるやせた青年だった。少し吃音の癖のある(実はわたしも吃音の経験があるのでよく察した)早口で自己紹介されたはにかみ屋の先生が、飯田先生だった。真面目を絵に描いたような先生で、テレ笑いと考えるとときに顔に手をやる仕事と眼鏡の下の優しい眼が印象的だった。

梶のなかの先生の温顔は昔のままだった。昔と書いたが、何を隠そう、私は外語出身者のなかで一番先に飯田先生にロシア語を習ったのである。それは今からちょうど40年前のこと。当時二年生になったばかりのわたしは、初等

わたしたちは授業が終わると代々木駅までの暗い夜道を先生と雑談しながら歩くのが常だった。大学では教授と話したこともないわたしは、先生のような折先生は理系の大学を中退した。ロシア文学をやるために外語に入ったこと、入学されるや強引に単語を暗記していき、夏休みにはゴリキーの作

品を読んだことなどを聞かされ、かなり衝撃を受けたものだった。そのころのわたしは、まさか外語の教師になるとは思ってもいなかったし、そもそもロシア語を教えるなどつゆほども考えていなかった。そのわたしが札幌、京都とまわり、飯田先生と同僚になるのだから、運命とは思えないものである。そしてたつた今、亡き先生の業績を調べることになり、いままらながら、驚いた。なんと先生には49冊もの訳書、著書、語学書があったのである。ローラスケートが好きだったという先生、本当にお疲れ様でした。今は軽やかに滑走しながら、天国へとおのほりください。先生の温顔は決して忘れません。合掌。

ロシア会総会・懇親会

二〇〇三年十一月二十二日(土) 午後二時から、外語祭が賑やかに開催されている府中キャンパスで、ロシア会総会と懇親会が行なわれた。

総会には会長の原卓也先生はご欠席で、古茶兵衛副会長ともう一人副会長の新田實先生が挨拶され、会計担当の井上勝幹事と会報担当の町田裕子幹事から報告があった。今後財政面の改善をはかり、実働幹事を増やしてロシア会の活性化につとめることを確認した。外語祭で在学生は忙しく全員ではなかったが、渡邊教授から学生幹事の紹介があった。

このあと、一九九一年にソ連共産党の一大独裁破棄をスクープ、世界に先駆けて報道、ポーン・上田賞を受賞した、産経新聞論説委員の齋藤勉氏(昭和47年卒)の講演「最近のロシア事情」を聞いた。齋藤氏は通算約九年モスクワ支局長をつとめた。ソ連崩壊にも際し、その後ワシントン、再びモスクワに三年半駐在し、昨年三月に帰国された。ソ連・ロシアの豊富な体験から語られた話題は政治、外交、経済、宗教、民族問題等々、現在のロシアが抱えている問題全般におよび、ブーチン政権の今後、ロシアのこれからを考えるのに、示唆に富む話であった。

午後四時からは会場を大学の生協食堂に移し、懇親会となった。今年特筆すべきことは、折から来日中のルンバ大学教授ほか、四名のロシア語教育専門家が飛び入り参加され、思いがけない交流を持ったことであった。東大ロシア語専攻の学生達からは活発、新鮮な印象を受けたそうで、そのOB・OG達が賑やかに集まっていることに驚いたそうである。十二月二日には東大で模擬授業をされたそうで、その模様はNHKが収録、ラジオロシア語講座座談会編で六月に放送されるとのこと。恒例のロシア民謡研究会の演奏、合唱があり、会場のあちこちでは杯を片手に懇談する姿が見られ、和やかな懇親のひとときを過ごした。

午後六時には会を閉じ、時間のある人たちは、後輩達の演ずる語劇「南京虫」を観に上演会場に向った。

ロシア経済と日ロ経済協力(日露関係を考える)

杉本 侃

今年三月に恙無く定年を迎えます。そこで私がこれまで取り組んできた掲題テーマを語りながら、三十七年に及ぶ実社会生活で感じたことをさりげ無くまとめたのですが、モージュナ、ダ?

1. 好調なロシア経済

九九年に底を打ち、二〇〇〇年に回復の兆しを見せると、その後、世界で注目される好況振りを。〇二年でもGDPや投資は危機前の九七年の水準に戻っていないが、プーチン治世四年で、ロシア経済は明るさを取り戻した(グラフ1)。

〇三年のGDPは四、三〇〇億ドル弱、鉱工業総生産は前年比約七%の伸びを見込み(いずれも出稿時未公表につき推定)、貿易収支は〇〇年以降六〇〇億ドル超を維持、対外債務はGDP比二五%余に低下(〇三年推定、金外貨準備高は七七〇億ドル(〇四年初)、インフレや対ドルレートも安定、イ・タク・ダーリエ)。

ロシア経済がかくも活性化に向かっている理由は何か。油価の高止まりと言う神風も吹いているが、失われたエリツイン時代八年を取り戻すべく、政

治・社会の安定、法税制度整備・透明性確保、不正・汚職・腐敗・マフィア撲滅など国内問題の解決に真摯に取り組むと共に、G8の正式メンバー入り、九・一一後の対米関係、イラク戦後処理などでの国際協調を進め、国際社会の信認を回復する努力が続けられた結果である。CISの求心力も高まっている。詰まるところ為政者個人(上に立つ者)の資質が人心を改め国を変えつつあるのだ。もともと、プーチン一期目の積み残しは多々あり、二期目は引き続き諸改革を断行し、具体的な経済・産業政策と地域政策を重視するだろう。エネルギー産業に過度に依存する経済構造を変革・効率化することも経済の安定的な発展に不可欠だ。

2. 経済発展に向けた鬼退治

大統領就任二ヵ月余の二〇〇〇年七月末、クレムリンに招集された成金どもはプーチンの喝にたじろいだ。「ロシアを悪くしたのは君たちだ」。大目に見て欲しいのなら、税を払い、社会に貢献し、政治に口を出さない。この約束に叛いた二人は国を去り、もう一人は獄中にいる。民営化の過程で盗

人同然のぼろ儲け、その後の無反省振りは目に余った。ユーコス・ホドルコフスキー前社長(ロシア最高の資産家)逮捕は秩序安寧に向けた当然の対応だ。寸劇オリガルヒア・石油王の幕終わり。アプロヂスメントウイ!

3. トウネリを抜けた日ロ経済関係

日ロ貿易は低迷(ロシアの統計では〇二年二八億ドル弱でロシアの貿易相手の一〇位以下)、投資も低位(〇二年末累積は一〇億ドル弱で一〇位)である。統計上はその通り。だが日本企業はグローバル世界で生きており、第三国経由や在外日本企業の実績を加味すると、〇三年には貿易も投資も三〇億ドルほどそれぞれ嵩上げされる。序に言えば、サハリン石油ガス開発プロジェクトだけで、日本からの総投資は八〇億ドル余に及び、生産のピークが重なれば、ロシアに年間約六〇億ドルの売り上げをもたらす。我が国の貢献度はいくとも高い。無闇にへりくだるのは誤解の基、もつと胸を張って良い。謙遜する前に事実の裏をも確かめたいもの。

なお、グラフ2(日本の通関統計)に見る通り、日ロ貿易は大幅な入超(輸入八・九に對し輸出二・一)で、輸入は四品目で八・九割を占め(八九年は輸出入・商品構成のバランスが良い)、日本の多様な産業が関心を持つる状況に無い。〇三年には自動車輸出と石油輸

入が増え、総額は六〇億ドルほどに達する見込みだが、インバランスの是正(輸出の拡大)と輸入品目の多様化に努めることは必要だ。

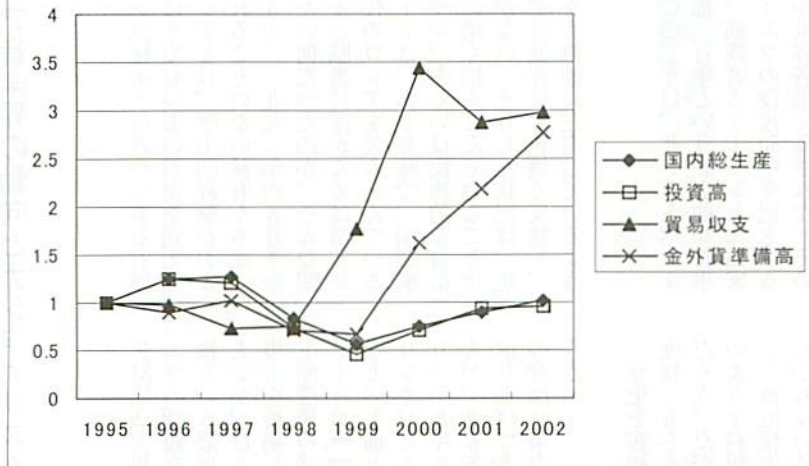
4. 戦略的バルトウニョールとしてのロシア

上述の如く、日本は経済交流で健闘しているとは言え、両国経済の潜在力から見ると、貿易も投資も謙虚に過ぎる。政治・外交面でも経済面でも、日ロは関係をもつと深化させて良い。

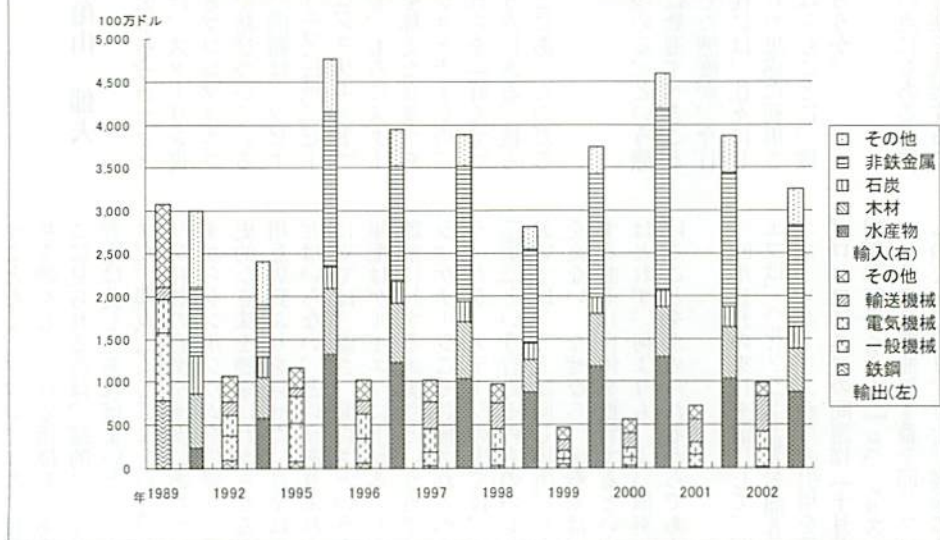
(1) 不可欠なエネルギー協力、我が国のエネルギー事情を概観すると、供給ソースの多角化、シーレーンの安全確保、アジアプレミアムの軽減などが国の経済安全保障を守る上で解決すべき課題は多い。その幾つかを、石油と天然ガスの宝庫であるロシアは解決出来る。もつと積極的にロシアとのエネルギー協力を進めてはどうか。資源確保を巡る中国との軋轢はもうとうに始まっている。エネルギーは国益そのもの。ロシアと手を携えて(土下座ではなく)、欲しがる国に売ってやる、そんな国策がナーダ・ダ?

(2) 極東ロシアは日本のカイド、人口が稀薄、大した産業は無く、他国に蚕食され、社会不安も解消されない。疲弊した極東を救う力はマスクヴァーにはまだない。自力発展の見通しも不

(グラフ1)ロシアの主要経済指標動向(1995=1)



(グラフ2)日ロ貿易動向(品目別輸出入構成)



透明。そんな極東ロシアは我が国の有
効な対中・対米カード足り得る。それ
が逆に米中が掌中に収めようとしてい
る。市場化一〇年を経てロシア側に自
主性の高まりが見え始めている今こそ、
我が国が極東ロシアに敬愛される隣人

になり得る最後のチャンスかも知れな
い。頭と金を使って、見える協力、自
助努力を促す支援をしたいもの。極東
ロシアでのプレザンスを通して、北東
アジアで頼られる兄貴になればオー
チン・ハロシヨ。

5. ストウラテギア無き マヤ・ローヂナ

米国の対露政策を一瞥すると、首脳
レベル、閣僚クラス、官民のチームワー
ク、民間ロビー団体、NPOなど交流

の枠組みは重層的で幅も広く、戦略性
に長ける。どれをとっても我が国の対
応は見劣りする。米国には追従でなく、
見習うことこそ必要だ。橋本エリツイ
ンプラン(九七年)、森ブーチンプラン
(〇〇年)、日ロ行動計画(〇三年)、そ
の時々の時流に乗って、趣向を凝らす
意味は否定しない。いずれも、文章の
巧拙は兎も角、形は綺麗に見え、折に
触れて政府間で進捗がレヴューされて
もいる。が、現実には信頼が醸成され協
力が進んでいるのか。省益あつて国益
なし、局益あつて省益なしと巷で囁か
れるが、政策に一貫性はあるのか。官
民の協力も見え難い。日露賢人会議も
悪くは無いが、多面的な交流を目指し
て設立された日ロ友好フォーラム21は
どこに行つたのか。昨年末のカシヤ
ノフ首相来訪時に日ロ貿易投資促進機
構の立ち上げが合意されたが同じ運命
か。魂を入れない無責任で場当たりの
な仏作りが多過ぎる。あれもこれも二
年で交代できる我が国役人の任期と無
縁なのか。政界も官界も民間もその時
の自分だけが良ければ良い。そんな日
本を作つたのは私を始めとする先輩で
ある。後輩の皆様は謝るとともに、頼
めるものなら、長期的視野に立って、
日本を、そして世界をもう少し判り易
くして欲しい。スバシーバ・ザ・ウニ
マニエ!

(昭42年卒。経歴：ソ連東欧貿易会、
サハリン石油開発協力力株、日本経団連
日本ロシア経済委員会。兼務歴：NI
RA客員研究員、筑波大・共立女子大
講師)

ロシア音楽界の動向とナシヨナリズム

亀山 郁夫

プーチン政権下で進みつつある右傾化の現実にとってもつよい不安を覚えている。ロシアとは、歴史的经验がおよそ生かされることのない稀有なる風土なのだろうか。一九九一年の八月革命とはいったい何だったのか。そんな問いが、次々と脳裏に浮かんで消えていく。現代のロシアを包み込んでいく危機的ムードは、ある意味で、国家崩壊のトラウマ、あるいは民族的な自信喪失を内に深く抱えこんでいることは疑いようがない。そうした状況は、現代のロシア音楽界にも色濃く反映し、その動向をも微妙に左右しているようにみえる。

去る二〇〇三年は、サンクトペテルブルグ建都三百年という歴史的な行事にくわえ、独裁者スターリンと作曲家プロコフィエフの没後50年を記念するイベントが世界各地で催された。そのなかで、はくが何よりも関心を寄せたのは、スターリンの没年にカフカースで生まれ、現在サンクトペテルブルグにあるマリインスキー歌劇場の総監督をつとめる指揮者ワレリー・ゲルギエフと、今年の秋、NHK交響楽団の芸術監督に就任する指揮者ウラジミール・アシケナージが、いわゆる「プロコフィエフ・ルネサンス」に果たした役割の相違だった。この一年、はく自身

FM放送や新聞、雑誌などでプロコフィエフの話題をとりあげ、スターリン復権という最近の風潮とプロコフィエフ人気、ひとつの環で結びついている事実を指摘してきた。問題は、ソビエト帰還後のプロコフィエフには、「ピーターと狼」「ロメオとジュリエット」などの名曲とならんで、もろにスターリンやソビエト体制を称えた音楽があり、ゲルギエフとアシケナージの二人が、世界各地でそれらを「好んで」取り上げてきたという点にある。彼らの意図は果たしてどこにあったのだろうか。

歴史を客観的に見つめる、という態度は、もちろん大いに歓迎すべきことだろう。だが、そうした態度が、今日のような右傾化の時代には、往々にして、政治権力の隠された思惑に利用されかねない危険性をはらむことに、彼らは気づいていたのだろうか。

問題はもう一つ別の点にもある。同じスターリン礼賛の音楽を演奏するにしても、スターリンと同じカフカースに生まれたオセチア人ゲルギエフと、スターリンに弾圧されたユダヤ人の血をひくアシケナージとは、根本的に立場が異なるということだ。ゲルギエフは、ほとんど説明らしい説明を施

すことなく、プロコフィエフ復権に情熱を燃やしつづける指揮者である。そこに見られるのは、端的にいうなら、音楽は美しくあればよいというスタンスだ。他方、アシケナージは、スターリン礼賛の音楽を演奏にあたって、みずからシンボジウムを主催し、その歴史的な意味を聴衆にわからせるなど、用意周到ぶりを見せた。音楽に説明などはいらない、というありふれた立場に立てば、潔さ、面白さという点で、軍配はゲルギエフに上がる。しかし、聴衆に対する誠実さという点では、アシケナージこそ評価されるべきだろう。だが、ステージの上では、つまり「演奏」という行為そのもののレベルにおいては、二人は同じ場所に立たざるをえない。なぜなら、演奏家は、演奏する曲それ自体を批判するという立場はとれず、何よりも、よい演奏に仕上げることを求められるからである。

昨年11月の来日を前にして、ゲルギエフは、ベルリンで演奏会を開き、レーニン、スターリンからの引用を鏤めたプロコフィエフの問題作「十月革命20周年記念カンタータ」と、シヨスタコーヴィチの交響曲第4番を同じプログラムの中で取り上げた。実際にこのコンサートを聴いた友人の話では、前半のプロコフィエフが終わるや、演奏会場は、ブラボーとブライングがいらり乱れる絶叫合戦になったという。

シヨスタコーヴィチの第4番は、作

曲家自身がスターリンの粛清を恐れて初演を撤回したといういわく付きの音楽であり、今日、彼の最高傑作の一つに数えあげる批評家も少なくない。では、この演奏会がかりにモスクワで実現したとして、どのような反応が予想されるだろうか。今のモスクワの聴衆には、おそらく、プロコフィエフの音楽の「無原則」ぶりに対し、ブライングを浴びせかけるだけの力はないと考える。同時に、シヨスタコーヴィチの第4番、そしてスターリンに抗した作曲家の「勇氣」に対し、熱い拍手を送るといった光景もおそらく期待できそうにはない。右傾化のムードに身をまかせ、国家崩壊のトラウマを癒したいロシア人からすると、アイロニーの鋭い棘をいっばいに含んだシヨスタコーヴィチの音楽など、願い下げというのが本音ではないだろうか。

はくはいま、二〇〇六年のシヨスタコーヴィチ生誕百年に向けて、小さな伝記を準備中である。スターリンという独裁者、プロコフィエフというライバルを遠く見すえながら、彼の音楽はどのような運命を強いられるにいたったのか。もちろん、彼の音楽にひそむ「三枚舌」の新たな工夫も見届けたい。しかし、生誕百年までの二年間に、果たして彼の人気がどこまで蘇ることができるのか。その問いは、おそらく、ロシアにおける独裁化の帰趨をめぐる問いとけつして無縁ではないはずである。

2年語劇"Клоп"

松尾聡子

"Из-за пуговицы не стоит жениться,
из-за пуговицы не стоит разводиться!
Нажатие большого и указательного пальца,
и брюки с граждан никогда не свалятся."

"Клоп"の冒頭部分である。たぶん、一生忘れない。すっかり、耳に馴染んでしまった。劇の練習に明け暮れた2ヶ月間、私達はロシア語の音の世界にどっぷりとつかった。70分の台本をテープに吹き込んでもらい、各々がそれを聞き続けた。長い文章が言えるようになることは、素直に嬉しいことである。そして、友達がスラスラと台詞を言うのを見て、お互いに感激しあった。ロシア語を自由に操っているかのように見えたからである。意識しなくても、耳で覚えたことは、口から自然と出てくるからおもしろい。外国語を声に出し、演技する。机上での学習とは、種類の異なる魅力がある。私達は、純粋にそれを楽しんだように思う。



滝川ガリーナ先生が、発音指導等に授業外で多くの時間を割いてくださった。時には、講義棟の外で、ベンチに座って先生を囲み、練習したこともあった。とても和やかな時間であったと思う。なんだか「学校」らしい感じがしたのだ。教えてくれる人の存在を近くに感じると、不思議なことに安心する。見てくれている人がいる、ということに対する安心感とその温かさである。人と人との関係の、根幹にあるもののような気もする。

みんなで一つのものを作り上げることは素晴らしい。誰かが出来なければ、誰かが助ける。こうしたことが自然になされていくのを見て、心が温まった。語劇は、みんなで過ごした貴重な時間であった。

ロシア留学記

細川靖之

僕は2002年9月から2003年7月までの10ヶ月

間、西シベリアの人口約150万、歴史100年ちょっとの、ロシア第三の都市・ノヴォシビルスクの、ノヴォシビルスク国立大学の外国語学部・国際ロシア語センターというところでロシア語を個人授業で勉強してきました。授業は週に20コマ(1コマ45分)で、そこには日本人留学生は他に2名(提携のある富山大の学生や、自らそこを選んできた変わり者)、他国の留学生は、韓国人・アメリカ人・トルコ人・ドイツ人・スイス人など、規模は小さいものの多くの国からの留学生がおり、大学の外国人受け入れ態勢もよかったです。街には大きなデパートや、ロシア一大きく、レベルも高いオペラ・バレエ劇場もあつたり、娯楽も多いです。モスクワなどの都市と比べ、治安も格段に良く、向こうでパスポートを持ち歩いたことなどありませんでした(ホントはいけない!)。無論警察に無意味に金を巻き上げられることなどありません。「シベリア」というだけあって、最も寒い時の気温は(新年を迎えて夜中に外を散歩したときなど)−40℃でした。まあウオッカを飲めばそこら辺はノープロブレム。他に貴重な体験といえば、大学の留学生センターの毎年恒例のイベントで、ロシアの軍隊の一日体験をしました。真冬でその日の気温は晴天だったものの−30℃以下。ロシアの軍服を着て、戦車の操縦や、バズーカなどの実弾をぶっ放すことができ、凍傷やケガは残りましたが、それ以上の経験を得られました。



「ロシア軍一日入隊」にて

ノヴォシビルスクはその寒さや、日本からの直行便がないということもあって、訪れることや、まして留学することはなかなかないでしょうが、そこだけでしか得られない魅力が満載です。よく言われることですが、シベリアの人は非常に暖かい心をもっていると僕は信じています。それを多くの人に知ってもらいたいので、モスクワやサンクトだけがロシアだと思わず、こういった都市にも目を向ける人が増えることを望んでいます。

会計から

ロシア会の会費は毎回お知らせしておりますが、つぎの通りです。
終身会費
三万円(振込料 一〇〇円)
または
年会費
二千元(振込料 七〇円)

納入頂いた状況は左表の通りで、ご支援の程は感謝致します。然し、納入人数は毎年減少の一方で、ロシア会復活の平成10年度約二百万円であった収入は、平成14年度は1/4程度となり、年間収支も約四万円のマイナスとなり

東京外語ロシア会2002年度収支

(2002年4月1日～2003年3月31日 単位 円、監査実施済)

1 収入	終身会費 (13名、単価3万円)	390,000
	年会費 (72名、単価2千元)	159,000
	利息	593
	合計	549,593

注.年会費には5千元や1万円など数年分を納入する例もある。

2 支出	会報制作費(印刷製本他作業代)	193,309
	会報宛名ラベル(支払先、外語会)	17,200
	会報郵送費	149,385
	霊園管理料(ミチューリン先生)	3,840
	懇親会への補助	219,014
	雑費(払込手数料、会議費他)	9,304
	合計	592,052

3 差引計算及び繰越金		
	差引不足金	▽42,459
	前期繰越金	3,502,699
	次期繰越金	3,460,240

ロシア会懇親会収支

(2002年11月23日実施、単位 円)

1 収入	出席者会費(卒業生37名 単価5千元)	185,000
	(在学生49名 単価1千元)	49,000
	本会計からの補助	219,014
	合計	453,014
2 支出	料理代(支払先、外語生協)	400,000
	飲物代(支払先、村野商店)	52,384
	払込手数料	630
	合計	453,014

ました。また、ロシア会の会員は現在約二千名、内約千名の方が全体の同窓会である外語会の終身会費五万円を納入されており、片やロシア会へ終身会費を納入された方は現在まで一四〇余名にすぎません。勿論ロシア会の活動自体はまだ細々としたものです。ご支援の程度によってはもつと立派に出来ると思います。

勝手なお願ひですが、どうかご支援の形はなるべく終身会費でお願いしたいので、くれぐれも宜しく。

(追伸) ロシア会会報送付の封筒の宛名頭部に〇印のある方は終身会費か今

自分の年会費納入済みの方なので払込票は同封してありません。

二〇〇二年度
終身会費納入者
(卒業年次順・敬称略)

稲垣靖男、高橋達男、中村平八、佐野 真、永島胤明、小川博司、信田 強、田川 実、新沢正毅、笠井典子、蛭田雅晴、田中達也、工通恵、根岸由美子、山下由紀江、田村 雄、豊田広記

ロシア会会計 井上 勝

編集後記

今回は今春卒業する人々をロシア会に歓迎する意味もこめて、この時期にロシア会報を発行いたしました。もつともロシア会の規約によれば在学生もすでに会員なのですが、若い方たちの一層積極的な参加を願っています。

巻頭は昨年九月の東京外語会主催海外ツアーに参加された古茶兵衛氏のロシア記です。

四月からの国立大学の独立行政法人化を控え、また、入試、学年末で忙しい渡邊雅司先生に母校の近況、亀山郁夫先生には、ロシアの行方が世界的な関心事である今、その一端を考えさせられる文章を書いていただきました。多くの方々のもう一つの関心事、ロシア経済と日口経済協力については、経団連日本ロシア経済委員会の杉本侃氏に書いていただきました。

飯田規和先生が逝去され、前々号、前号に続いて恩師の追悼文をお載せすることになりました。淋しいことです。昨秋のロシア会についての報告は、3頁をご覧ください。

7頁は在学生のページ。横組みにして、在学生お二人の文章を載せました。最終頁は会の運営にとって最も大切な会計の報告です。どうか、よくお読みになって、ご協力をお願い申し上げます。